

【67】「赤水門」騒動記

東京下町を流れる隅田川は、もともとは荒川の下流部の河川でした。激化する水害対策として大正時代に新しく放水路が開削され、そっちが荒川本川となり、隅田川は荒川から切り離されて独立の川となりました。(もっとも現在の河川法の下での整理では荒川水系の一員です。)

荒川との締め切り堤防には水門(岩淵水門)が建設されました。荒川の洪水時には水門のゲート(扉)は閉鎖されて洪水は隅田川に流入せず、平常時にはゲートは開けられ舟が通行できます。この水門が大正13年に竣工して以来、半世紀以上が経過し、老朽化と地盤沈下のため、その機能に支障が生じるようになったので、新しい水門が建設され旧水門は撤去されることになりました。

ところが、この旧水門は明治末大正期を代表する貴重な土木構造物として保存されることになり、それならば創建時の原形に近づけて復元しようという話になりました。半世紀以上の時の経過の間に、旧水門にはゲートの改造をはじめ様々な工事が付加され、もとの外観とは著しく異なった形になっていたのです。

土木史や景観の専門家も加わった検討委員会で復元計画をまとめ、地元説明会を開催しましたが、意外なことに地元の人々には復元反対の声が強かったのです。

旧水門に付加工事が行われたのは今となっては昔の昭和30年代のことでした。地盤沈下のため旧水門の横引きのゲートは作動しなくなり、替りに新しく背の高いスルースゲートとそれを支えるやはり高い鋼製の門柱が設けられ、いずれもサビ止めのため赤く塗装されたので非常に目立つ存在になりました。そして地元の人たちは親しみを込めて“赤水門”と呼び、赤水門は地域のシンボルのようになっていったのです。

創建時の姿は、背の低いコンクリートの灰色のトーチカのようなので、インパクトは大きかったのでしょう。地元の住民の方たちにしてみれば、子供の頃からあの水門は赤水門で、そんな大昔の姿なんて知りもしないので余計な事はしないでくれというのです。このはなしはメディアも取り上げ、区議会や政治家も乗り出してきて、身内の建設省の労働組合までもが異論を唱える有様となり、又、治水工事そのものでもないのに、復元計画は中止されました。落ち着いて考えると、歴史的建造物を残すというテーマでも、創建時の姿を残すのか、その後の年月の経過に従って変身してきた現在の姿をそのまま残すのか案外難問のようでもあります。

新設された水門は3基の大きなゲートが青く塗装されていて早くも地元の人たちからは“青水門”と呼ばれて愛されているとのこと。赤水門と青水門が肩を並べて今日に到っています。